2022年度

SS　小　論　文

11月27日（土）　地域創造学環　9:30 ～ 11:00
【学校推薦型選抜 I】

注 意 事 項

試験開始前

1 **監督者の指示があるまで，問題冊子，解答用紙，下書き用紙に手を触れてはいけません。**
2 **監督者の指示に従って，全部の解答用紙（3枚）に受験番号を記入しなさい。**

試験開始後

3 この問題冊子は，4ページあります。はじめに，問題冊子，解答用紙，下書き用紙（3枚）を確かめ，枚数の不足や，印刷が不鮮明なもの，ページの落丁・乱丁があった場合には，手をあげて監督者に申し出なさい。
4 **解答はすべて解答用紙に記入しなさい。**（下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は，採点対象とはなりません。）
5 文字数制限のある解答用紙の記入については，下記の点に留意すること。

・書き出しは，一マスあけない。
・改行したら一マスあける。
・句読点はそれぞれ一マス使う。
・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ一マス使う。
・行の末尾の句読点は最後のマス目の文字と一緒に書きいれる。

6 問題は，声を出して読んではいけません。
7 配点は，比率（%）で表示してあります。

試験終了後

8 問題冊子と下書き用紙は，必ず持ち帰りなさい。

次の文章を読んで、後の問一から三に答えなさい。

コモンズは、わが国では「入会（いりあい）」を目的とする共有地を指す言葉で用いられているが、欧米では公園などのオープンスペースの意味合いで幅広く使われている。使われる国や主体によってその定義は異なるが、共通しているのは排他的でなく共同で利用できるという特性である。

コモンズといえば、ハーディンの「コモンズの悲劇」という言葉がよく引用される。イギリスの放牧地を例に取り、共用の放牧地にだれでも牛を放牧することができると、ただで草を食べさせられるわけだから、みんな一頭でも多くそこに放牧しようとする。その結果、たくさんの人が多くの牛をそこに放牧してしまうがゆえに、草がなくなって、放牧された牛たちは死んでいく――という悲劇を紹介したものだ。「コモンズの悲劇」は経済学でよく使われるが、ハーディンは経済学者ではなく生物学者で、一九六八年に、『サイエンス』という雑誌に発表されたものだ。これは人間というのは、みんなが全員の将来のことを考えて行動するのではなく、自分のエゴ、自分に都合のいいように行動していくものだから、市場原理に任せておくと、そのような共有地は悲劇をもたらす、という考え方である。特に一九六八年は公害問題が巻き起こっていた時であり、ハーディンのこの考え方は、環境問題や公害問題が出てきた状況を説明するために大変分かりやすく、広まっていった。しかし、一方でこの悲劇的なストーリーのイメージから、コモンズに対して否定的なイメージが浸透していったともいえる。皮肉な表現をすれば、これこそ「①コモンズにとっての悲劇」であったかもしれない。

しかし、ハーディンの提起した悲観的なコモンズ論とは異なる視点でコモンズ論を提起した学者が現れた。二〇〇九年にノーベル経済学賞を受賞した、エリノア・オストロムである。彼女はアメリカの政治学者で、女性初のノーベル経済学賞受賞者でもある。彼女の業績は、コモンズのガバナンスに関する研究で、自主的な取り決めによる政治的意思決定の構造解明に取り組み、自主的な統治によるコモンズが成立することを立証したのである。彼女が研究対象としたコモンズは、世界中の水資源、漁業資源、森林資源などを地元地域の人々が管理するというものである。それらの資源の利用については、近年深刻な利害対立が発生し、諸地域においてさまざまな問題が発生してきている。彼女は、その解決に向けて、これまでのような「政府か」「市場か」、という二者択一的な選択ではなく、第三の解決の道として、コモンズの当事者が自主的に適切なルールを決めて、自主的に統治できる（セルフガバナンスの）可能性があることを、実証的に、また理論的に示したのだ。

彼女は、世界中の数多くのコモンズの事例を丹念に調べ上げ、コモンズの自主的統治が長期的に存続していく具体的な条件を示した。さらに、実証的に得られた知見を積み上げて、ゲーム理論を使って、特に自主管理にとって必要な協力行動について、その可能性を分析している。彼女の研究は、共有資源としてのコモンズという仕組みを社会のなかに広めていくことが社会の発展にとって非常に重要なテーマであるという考え方に支えられている。コモンズの利用を市場原理に任せるか、あるいは国家が管理するかという対立図式で、不毛な議論が続いている状況に対して、共有資源をきっちり管理していくためには、利害の対立を超えた協力関係の構築により自主的に管理していける②第三の道があることを示したのである。

また、共有資源の管理という切り口で、地方の多様な創意工夫から生まれた仕組みに高い評価を与えたことは、地方が主体的に資源管理に向けて動いていく上での理論的な支柱にもなった。

「コモンズの悲劇」を生み出すのは、人々の利己的動機に基づく行動である。しかし、エリノア・オストロムが調べた数多くの事例は、コモンズの利用者が相互に啓発し合い、学びながら長期にわたってコモンズを管理する知恵を醸成させていく可能性を示唆するものであった。彼女の研究は、政府による規制や市場原理に委ねることなく、地域の人々の自主的な管理によりコモンズの存続が可能であることを示している。地域の人々が自分たちの力を合わせれば、自主的に成長していけるという、自信とやる気を与えてくれたことの意義は大きい。

彼女は、コモンズが長期に持続していく条件として、「コモンズの利用ルールと地域条件との調和」、「ルール違反者に対する段階的制裁」を挙げている。人間が利害対立を克服して協力を実現していくためには、地域の特性に応じた自ら守るべきルールを構築していくこと、そこにはルール違反者への制裁も伴うことなどを示したのである。

それは、地域におけるビジョンとしての将来計画と、それを実現するための規制計画に置き換えられる。長期的なビジョンを明確に持ち、その目標に沿って、それを阻むものは排斥していくという、強力な政策手段を持つことによって、コモンズとしての政策がより一層強いものになっていくのだ。

彼女の考え方がノーベル経済学賞の評価につながった要因の一つに、インターネットの普及があるといわれている。インターネットは、みんなが共通に利用できるシステムであり、モノや情報を所有する時代から、互いに利用し合う時代への変化を支えるソフトなインフラとなってきた。情報通信技術の進展は、単体の排他的利用から、複数体による重層的な利用により資源の持つ価値を総体的に高めていく流れを着実に加速しているといえる。

「人類共通の資源である地球は有限」ということが共通認識となって議論されるようになったのは、ここ四〇年ぐらいのことだろう。最初の大きな転機は、一九七〇年代前半の「オイルショック」であった。それまであふれるばかりの石油を使って文明生活を享受していたのが、実は石油は限られた資源なのだということを強く認識させられた出来事であった。それ以降、成長には限界があることを前提にした議論が展開される。ローマクラブの「成長の限界」というレポートが注目されるのもこの頃だ。ローマクラブが用いた経済予測モデルの手法であるシステム・ダイナミックスは、それまでの右肩上がりの直線的なトレンド（傾向）式の予測モデルではなく、曲線や下降線もある「限りある地球資源」を前提とした柔軟な発想でつくられているモデルであった。

それから二〇年以上が経過して、九〇年代に入って地球温暖化が大きな問題として議論されるようになった。当時、「コモンズとしての地球」という言葉が使われるようになった。わたしにとって、一九九二年のリオデジャネイロで開催された地球サミットは大きな転換点であった。それまで開発と環境を対立概念としてとらえてきた政策論議が、「持続可能な開発（サステイナブル・デベロップメント）」という概念で、同じ土俵で議論できるような状況になったことは、革命的ともいえる転機であった。それまで「開発か環境か」で不毛なエネルギーを費やすことが多かった議論が、「③持続可能な開発」というコンセプトを共有することで発展的に進むようになったことの意義は極めて大きい。

さらに、二〇一五年九月の国連サミットで持続可能な開発を進めていくための具体的な目標（ＳＤＧｓ）が採択されたことはさらに大きな前進だ。持続可能な世界を実現するために、具体的に一七のゴールと一六九のターゲットを示し、それを世界の国々が共有して、共通の目標に向かって協調して取り組む潮流が生まれてきた。特に、世界が求める変化を「見える化」したことで、民間企業においても社会的な課題解決を事業成長に結びつけていく機運が高まってきたことの意義は大きい。

【小磯修二『地方の論理』岩波新書、二〇二〇年より。
注：出題の都合上、原文の一部に変更を加えている。】

問一　著者が言う「コモンズにとっての悲劇」（傍線部①）とは何か、一〇〇字以内で簡潔に述べなさい。（配点一〇％）

問二　傍線部②について、「第三の道」とは何かを説明し、それを実現するための著者の考えを三〇〇字以内でまとめなさい。（配点三〇％）

問三　傍線部③について、「持続可能な開発」に対する著者の考えをふまえ、そのような「コモンズ」を活用した地域活性化に関して、具体的な提案を含めて、あなたの考えを六〇〇字以内で述べなさい。（配点六〇％）